

て始末書をかけと云ふから書いた、丁度其時合格の通知に接した、同時に先生からも成功を嬉んで書き送られた葉書を私は今も大切に保存して居る。之れが自分の出發點であつた。

たつた此間のことである、私は「みづゑ」に投書する積りで英國の國立美術院の會員の小傳を送つたら先生は十一月號に掲載するとの御返事を戴いてうれしかつた、先生に逢に行かふと思ふ内に原稿中のアペー畫伯が八月に死んだので其訂正せねばならぬこと、御無沙汰の文句をを書いて葉書を出した、先生は私の葉書を讀まれた其翌る夜位に逝去せられたであらふ逢ひ度かたのに、逢へなかつたのが悲しくてならぬ。

先生の畫室を伺へば先生には確かな強い御考へがあつたそれは「みづゑ」の幾號かにも書いてあつたが、日本の國民性にも亦我建築にも適合する繪は「みづゑ」であるとの主張であつたらしい故に先生の繪は現今の我藝術界の潮流に（寧ろ流行かに）それなかつたかも知れぬ、然し之れが責いと思つて居る故に先生の繪には先生の精神が皆表はれて居るとを自分等でも讀み且人に語ることが出来る、先生は實にあんな繪の様な先生であつた君は繪をを書いて名譽と金を獲たいか、又は自分が書き上げたのを眺めて楽しみ度いか、或は只書くことと云ふ努力がして見度いかの三つの質問を發せられた、私は色々の考へが混合して居たから返事を申上げることが出来なかつた、けれど後から考へて我々の立場は第三番目に居なくてはならぬと悟つた而して私は今に何も出来上つた繪はない、私には一生こんなことが續

いても致方のない尊重すべき努力だと觀念して居る、且つ天才も持つて生れなかつたから。

先生の恵に浴した人は多くあらう、私は先生の恩澤を被りたる者の内の一番少ないもの、終點の末輩である、然れども小さな草葉の露にも比較ならぬ我將來の身の上には重大なる恩恵であつた如何しても先生を忘れることが出来ないのである。

齋場の外からも私は泣いた、先生の御柩が雜司ヶ谷の土の上に隠るゝときもモー之れが別れだと思ふて涙が流れた、墓地のぐるりに大勢の門下生が涙を流したからと云ふ譯でない。

秋風の吹き初むる雜司ヶ谷の森の元の冷かい土の下にあの繪の様な先生が今宵より永眠さるゝと思へば。（十月十二日）

## 秋の旅

白 鷗 生

雨がしと／＼と降つて居る、十月の終の日曜の朝。

常には日和男と自慢をして居るS EやT Yも只もう尻古垂れて雨の中を鹿島立する程の勇氣が出なかつたのだが、それでも十時過ぎには青空が見えて『矢つ張り僕等は日和男だ』と鼻を高め乍ら呑氣な三人連れは牛込停車場へぶらりと押し出した。

二週間も前から、彼處にしゃうか此處にしゃうかと、地圖を擴げたり人に聞いたり、やつと決めた、候補地が二箇所あつた、第一の方は中央線與瀨驛で下車して半里許り離れた吉野驛へ陣取る事、第二は上野原驛で降りて鶴川村を根據地として四方を

荒し廻る事、この二つであつたが結局上野原の方に決めたのであつた。

十一時四十三分の發車、

武藏野の曠い原に起伏する丘や、はんの木の林や、畑や、農家が一様に秋の氣を籠めて、額椽のやうになつた車窓に限られて一つ一つ何物かの印象を我々に與へるのである。

浅川からは平野を離れて山の中に汽車は我々を運んで往く、惡魔の叫ぶやうな恐ろしい音響と、暗黒の、旅客に一種の不安を興へる隧道とんねるが、連續して秋晴の山や水の明るさを幾つにも仕切つて我々の前に開展する。

上野原に着く。停車場の構内から線路を横過つて崖の下の往來に出る、陸地測量部の五萬分の一の上野原圖幅をたよりに松留の方に往く。紅葉には些と早過ぎる位で。常盤木にもさすがに秋の氣は何はれるものゝ、何となくもの足りない。可なりな宿屋が一軒あつたが土方が大勢下宿してゐて僕等は泊り度くはないので、ずん／＼往く。八澤やっざわといふ所は畫材があるらしい、途々鶴川に宿屋はあるかと聞くと、昔はあつたさうだが今は甲州街道が變つたので上野原でなくばないといふ。八澤に一軒魚屋で下宿人を置く家があるといふ事であつたが、僕等は兎に角上野原の方に往く事にして崖を上つて往く、崖の上の町、見る限り桑畑でかこまれた新らしい眞直な街道の兩側に立ち並んだり平凡な田舎の町、汽車の齧す浮薄な空氣に満ちて見えた、宿屋の主人の横柄さよ。僕等をじろ／＼と見ての應對ぶり、此の町に

居るのがいやになつた、第一案の吉野に往かうじやないかといふで此處を引上げた、停車場前の去年S Eが休んだ茶店で休憩して汽車を待つ。一驛戻つて與瀨驛に着いたのは秋の日の暮れ果て、三日月の光冴えまさる頃ほひ。月の光を浴び乍ら往く、渡船場の方へと降りて往く、月夜の渡船場、まあ何といふローマンチックな畫題だらう、『オーイ』と呼ぶと船が對岸を離れて來る、水を限つた崖は夢のやうにそり立つて居る、勝瀨の村がぼんやり霞んで見える、村はづれにも一つ渡し場がある、水で圍まれたなつかしい匂のする村だ、二つ目の渡し場から上に往くともう其處が吉野だ。吉本屋といふのに泊る、おかみさんの話では此處へ随分畫家が來たさうだ。

明る日は早くから出かけて近い處からあさり廻る、紅葉には少し早いのが残念だといひ乍ら畫材を探した、吉野の裏手の崖を上つて往くと村がある三人連を見て村の人達は仕事の手を休めて出で見る、TYか素早く美人を見付けて、此村に村長村といふ稱號を捧げるとにした、それら後にも二三度その村に往つたが、往く度に美人は何時でも出て來た。

その日の午後は奈良本といふ村に出かける、山の中腹にある可なり面白味のある村だ、二三の材料をスケッチして歸る。

美人に眼の早いTYは吉野の中程にあるたばこやに美人が居ると報知した、宿屋から少し隔つて居て近處にたばこやのあるにもかゝらず、我々は其處へたばこを買ひに往く事にした、その店は荒物を賣つて居る、TYは一週の中に下駄の二足もわざ

とてもあるまいが打ち壊して此店の御厄介になるといふ始末。  
(未完)

## 濱田の海

—テツタロー—

コトシといつたと思ふとギイギイ艫の音が聞え初めた。いつの間に来たものか僕の立つて居る粟島の岩壁の直下にはかすかな灯を点けた漁船が一隻沖に向つて進んでゐる。灯にすかして見ると船の中には漁夫が二人居るらしい。月はニユートラルチントの雲に包まれて淡暗い光を下界に投げてゐる。いたづらに凄いな夜だ。

『沖や荒てるのう』

『荒れるなあいいがあす朝こゝを歸る時やどげえな元氣だらうかのう』

漁夫等の聲もだんだんかすかに船は艫の音と共に沖へ沖へと進んで行く。それにつれて灯はインチゴを流したやうな海面に長く長くゴールドの尾を引く。はるか向ふに眠つて居る矢名島の岩角に打寄せる波の音がドツド―と響いた時可憐な灯は。ポツツリ消えた。

後は寄せてはかへす波の音かすかに。

## 黒き土

奥村博

黒き土み墓の土ふるとき悲しみ又もあらたまり來ぬ

淋しさをひた吸ひ度さに泣き度さに

こよひもひとり師の墓に行く

あはれなる博てふ子はこよひまたみ墓のところに

忍び泣きする

餘りにもめしと見ゆれしかはあれどその悲しさに又も涙す  
悲しめど哀しめとなほつきぬかな我が師の君の死を痛むこと

## 三人の寫生行(一)

大阪 長谷川利行

寫生旅行などと洒落居るが其實鉛筆スケッチ位で済し込んだり。風彩は僕が一番弱年で下等、同志者のK君大阪府廳のS君は人望とテレカクシで頗る上等、行く宿々の待遇は周到であつた。S君は油繪具を抱へ十二號キャンバスを張込んで居たのに比較してK君は新調の天下先生撰擇の水彩道具イーゼルは輕快な奴で道行に僕の重たいのに泣かされる。どう見てもK君の長髮の重味で畫家らしい。前夜は日本橋の吉野館で合宿し八月三十一日の未明。箕面電車の人となつた、空にはコバルトの曇多く快晴疑ひなしであつた。

池田町で下車して壁の汚い河岸の家の畫題をさぐる。花月亭瓢屋、の遊び屋の裏には靜止したる水の面、面白ければとてK君はハツ切を描く、藝者二階の窓より「オホ、」と冷笑を浴せかける。K君たまらず嘲弄する。S君この二三時間の間に池田川にしたりて「女と赤き印象」といふ命題に洗濯女を板に描く、